

『ノーベル賞と研究環境』

皆様ご存じの通り、2021年ノーベル物理学賞を日本出身で米国籍の研究者・真鍋淑郎氏が受賞されました。現在90歳の真鍋氏は1960年代にコンピューターを用いた気候変動モデルを作成し、地球温暖化予測の基礎を築かれました。50年以上前に、現在、地球規模の課題となっていることをテーマとされていた先見性に驚きますが、ご本人は好奇心で研究されていただけである、とおっしゃっています。日本ではさまざまなしがらみがあり、自由に研究することは困難なため、研究の場をアメリカに移されたとのこと。



これまで生理学・医学賞、物理学賞、化学賞の自然科学系のノーベル賞3賞受賞者は、日本人研究者は25名おられますが、アジアの中では際立っています。

しかし、近年は研究開発費用不足などの研究環境が十分ではなく好きな研究力ができないため、優秀な研究者が海外に拠点を移す、いわゆる頭脳流出が問題となっています。

今年8月にはノーベル賞有力候補の1人とみられている藤嶋昭・東大特別栄誉教授が研究チームごと上海理工大学に移籍されました。

これに対して「国益に反することであり、研究者の移籍を規制せよ」などの議論もあるようですがこれは的外れであり、研究者は純粋な探究心でよい研究ができる環境を求めるのであります。

英国の教育専門誌は、世界の大学を、教育・研究・論文の引用数・国際性・産業収入の5項目で評価し毎年ランキングを発表しています。

例えば、中国は北京大学と清華大学の共に16位を筆頭に100位以内に6大学が入っているのに対し、日本はといえば100位以内には、東京大学35位、京都大学61位の2大学が入っているにとどまっています。

このランキングですべてが評価できるものではありませんが、やはり世界レベルで見れば日本の研究力不足を物語っているものと考えます。

科学技術立国を目指す日本としては、目の前の経済的な目標のみにとどまらない、好奇心に基づいた夢のある研究ができる研究者が育つ環境を整えてほしいと望みます。